

嘶家という仕事は、よく人様からお品を頂きます。この時期は、我が故郷はミカンですね。年の瀬から新年は、見ない日がないくらい何処に行っても見まじり頂きます。昔ながらの純喫茶は、席に着くとテーブルの上に籠いっぱいのミカンがある。もちろん誰もサービスと思っただけで、コーヒーが来るまで、何個もパクパク食べる。万が一、お代を取ったりなんかしたら、その店が三日で無くなるでしょうね。それほど身近すぎるミカン。私の会でもこの時期、パンフレットと一緒にミカンを一個づつ渡したものです。「ありがとう」と喜んでくれる人から。「今年のは、酸いなあ」と遠慮なくいう人から様々ですが、この作戦を実行すると、大体は開演前からほわっと和みます。大阪の館ちゃんのノリが和歌山ではミカンですね。

ぼんぼ娘、ピーのボンポコナー

子供が、大きくなると、スマホをいつから持たせるか？問題が、出てくる。娘も今年が小学六年生。そろそろスマホを持たせようと思いつつ、スマホを持つことで、不用意に誰かと、すぐに、つながってしまう、なにか危険な目にあうのではと考え

いる。子供時代に、スマホがなかった世代として、いくつから子供に持たせるのが、正解なのか？悩んでしまう自分は、本当に情けない。その点、うちの師匠は素晴らしい65才過ぎてからスマホを、持ったにも関わらず、今では完璧に、使いこなす、昼夜問わず、返事に困るような自分語りの文章や、見たくもない動画を、送り付けてくる。終いには、私のことを、寄席情報誌の「よせびつ」と勘違いをしてるのか？自分の落語会のチラシの画像を、送ってきては、拡散を希望してくる。又、ラインの転送の仕方を教えたばかりに、あちこちにおくりまくっているらしい。こういう承認欲求を満たすツールとしてSNSがあるにも関わらずSNSを使わず（いや、使えず）私に押し付けてくる。本当に、素晴らしい師匠だ。ただ、修行の足りない私は師匠にスマホを持たせるのは、まだ早かったなと後悔している。

文福のおいんストーリー

最近、よくきくのが就活終活、婚活、トンカツ、いやあのね、昔、ある先輩芸人が、トンカツ食べて、「うまい!! やつぱりトンカツは、ブタにかざるなあ〜」

さあ、その終活ですが、人生のしまい仕度という感じで

すが、私としての「終活」は、人生の最終コーナーに入ってから、新しい活動をするという「終活」新たな恋愛、趣味など、まだまだ生涯青春!!性春トホホー。まあ、私も、三月末で、70才。昨年の春に、嘶家生活50周年でしたが、まだまだコロナも、大変でしたので「50周年記念公演」等は大々的には、出来ませんでしたので、今年、何かアクションを...

「桂文福古稀つかつて会」や、「古稀おろし寄席」など、やりたいなあ。もちろんライブワークショップの「大相撲 愛」もぼつちり。年六場所、生観戦しまつせ!!たのまれもせんに……。昨年の九州場所一年納めの土俵も、見に行きました。へあ〜 ドスコイドスコイ博多の空に、鳴りひびく、やぐら太鼓やふれ太鼓、それよりおもしろいめたいこ。

高安関は、又も相撲の神様にそつぽをむかれましたか、悲願の初優勝ならず。阿炎関が感動の初優勝!!しかしこの一年十二勝が二度に、十一勝が一度の星をあげて安定している高安関は、まず大関復帰が、確実味をおびてきました!!がんばってや!!

この初場所は、明治42年に、横綱の地位が明文化されて以降、初の「二横綱、一大関」という、さみしい番付、久しぶり、関取に復帰して、大銀杏と化

粧まわしの朝乃山関も大関復帰どころか、横綱をめざしてほしいなあ〜とこんな話を同部屋（高砂）の行司、木村朝之助さんや呼出し邦夫さんらと、博多の中洲や天神で、飲みながら話をしたかったが、まだ、日本相撲協会のコロナのガイドラインで、交流は無理でしたので、一人もつ鍋や、博多ラーメンで、まさに、孤独のグルメ。これが、博多の近くの街なら孤独の久留米、チャンチャン。

編集後記

皆様、今年も五代目文枝一門の連中の高座、そして、「いちもん新聞」をどうぞよろしゅうお願い申し上げます。この号は、四月末まであちこちで、配布させて頂きます。まだまだコロナもおさまりませんが、それぞれ健康に注意され、元気に前を向いて頂きたいものです。しかし、最近、有名人の方々が天に召され、あらためて、ごめい福を念じあげます。合掌。

俳優で、バラエティなどでも人気の渡辺徹さんや、「あかんたれ」の名演もなつかしい志垣太郎さん、フーテンの寅さんで味のある源ちゃん役の佐藤次郎さん、アニメソングの帝王水木一郎さん、温かみのある味わい深い演技のあき竹城さん、それぞれファンの方々もおさみしいですね。我々の仲間でも、三遊亭

円楽師匠、「笑点」でおなじみの大スター。落語も名人芸でしたが、東西落語界の交流など名プロデューサーでもありました。そして、93才まで現役、芸歴81年をほこる四代目金馬改め三遊亭金翁師匠。私らの子供時代の小金馬時代のNHKテレビ「お笑い三人組」もなつかしい。落語協会の大御所で、「五百嘶」などでうまれた古典落語の発掘にご尽力された、三遊亭円窓師匠。落語芸術協会で、いぶし銀の味の三遊亭左遊師匠、私と同年なので……。そして上方落語界でも、若すぎの林家市楼君 42才。おじいさん、お父さんと三代続いたサラブレッドでしたが三代目は56才、四代目は54才と短命でした。林家二門のはからいで、告別式で、五代目林家楽語楼を追贈され、極楽寄席での襲名披露となりました。生かされている我々は、感謝の心を忘れず、落語道にはげみたいと思えます。皆さまもご自愛下さい。(文福)

